St. Luke's International University Repository

2000年度マギル大学夏期語学研修報告:学術活動報告（2000年度）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 園城寺, 康子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/388

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

2000年度マギル大学夏期語学研修報告

本研修の今年度のプログラムは昨年とほぼ同様7月29日から8月21日までの3週間実施された。参加者は6名（1年生2名，2年生4名）で，前期試験を教務部に前半に追い込むようにお願いしての，慌ただしい出発であった。そのため研修初期には試験の疲労と時差ボケが重なったようだが，よく耐えて全員出席していた。マギル大学側の長年担当だったコーディネータが6月より替わったため，私も許されて少し遅れて出かけ，学生たちと4日間をともに授業を見学したり，病院見学に同道したりつぶさに実情が把握できた。

研修内容は例年どおり，主として午前中の語学プログラムと午後から夕方にかけてのカルチャープログラムからなっており，カルチャープログラムは多彩で，病院見学，コンサート，名所旧跡見学（ナイアガラ，トロント，オッタワなど），また希望者は『赤毛のアン』で有名なプリンスエドワード島への一泊旅行（2年生参加）などあり，いずれも好評であった。特に週末のホームステイでは，自分の英語力を試す機会にも恵まれ，暖かいホストファミリーとの別れが悲しかったとの報告が多かった。

語学授業には東京医科歯科大学，京都文教大学や日本女子大学の学生など加わり12名編成であった。アンケートによると本学の学生のみに絞った授業ができなかった点で2年生には少し不満だったようだが，1年生ではむしろ視野が広くなり友人もでき貴重な体験であったと高く評価している。担当教師には全員満足していたが，モニターは新人だったせいか，評価にはばらつきがあった。スケジュールはハードだったが，生活全般，自然環境，治安なども含めたプログラム全体に対する満足度は高く，もっと長期の研修プログラムや留学制度があるといいという感想も書かれていた。

帰国後は特にリスニングに慣れた感じがするし，話すことに自信がついた様子で英語の授業でも活発に活動をしている。英語での発進力の増強という点では効果は高く，また，2年生は帰路アメリカ旅行を自分たちで計画実行したりして異文化理解の良いチャンスであったと思われる。

（英語：園城寺康子）